



Title	「ヨボ」という蔑称
Author(s)	権, 錫永
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 132, 139(右)-172(右)
Issue Date	2010-11-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44296
Type	bulletin (article)
File Information	ARCS132_003.pdf



[Instructions for use](#)

「ヨボ」という蔑称

権クオン

錫ソク

永ヨン

はじめに

かつて「朝鮮人」という語が蔑称であったということから話を始めたい。

「朝鮮」は、一八九七年に「大韓帝国」(略して、「韓国」となり、日本人の朝鮮人に対する一般的な呼称は「韓人」へと変わった。実際には、従来の「朝鮮人」と新たに加わった「韓人」の両方が使われたが、文献を通して確認する限りでは、後者の方が主流であった。その後、韓国併合を機に「韓国」は「朝鮮」と呼ばれることになる。こうして「韓人」から「朝鮮人」に引き戻された朝鮮の人々は、他に公正さを担保しうる呼称を持たないまま、この蔑称に身をさらすほかなかった。

民族または国民を単位とする蔑称は珍しいものではない。現に、昔から日本は朝鮮で「倭」と呼ばれ、日本人は「倭

「ヨボ」という蔑称

人」または「倭奴^{ウヰム}」と呼ばれた。植民地期にも、ある日本人は、釜山辺りで「倭奴^{ウヰム}々々」と言つて逃げていく朝鮮の子どもたちに侮辱されたような気持ちになつた、と語つてゐる。⁽¹⁾だが、こういつたことが時たまあつたとしても、植民地期の朝鮮人が面と向かつてこの語を使うことは難しく、一般的にほとんどつぶやきの域を出るものではなかつたであろう。同じ蔑称でも、当事者の経験の質によつてその効果は大きく違つてくる。蔑称をもつて大がかりに侮辱された経験は傷となり、そうやつて傷を負つた者は、その蔑称によつて（それを用いる発話者が必ずしも侮蔑の意識を持たずとも）疼くような痛みを覚えるからである。この点に、「倭人^{ウヰム}・倭奴^{ウヰム}」と「朝鮮人」の違いがあつたと思われる。

次の文章にはこの問題についての正確な認識が示されていて興味深い。

内地人から見れば実に案外であるが、朝鮮人といふ語を用ゐるのが厭がられる。それは「朝鮮人の癖に」とか、「朝鮮人が何だ」等の語が不用意に内地人の口から屢々発せられたことがあつたので、朝鮮人といふ語そのものゝ中に既に侮辱的の意味が含まれてゐると解せらるゝからである。

また、「鮮人」といへば略していつてゐる、粗末に取扱つてゐるとして、これ亦侮辱の語であると解する。(略)
「半島人」とかいふ人も出来たが、それは朝鮮に在る時のみの通用語であつて、満州や内地では意味をなさぬ。それで最も障りにならぬのは「の」の一語を加へて「朝鮮の人」といふのであるが、今の所これより以上適当な語がない。⁽²⁾

第一に、「朝鮮人」という語をもつて侮辱された経験こそがこの蔑称の蔑称たり得る条件であつたことが分かる。第二に、「朝鮮人」や「鮮人」という語を侮辱的な意味でとられることに日本人が当惑し、呼称の選択に迷つた末の苦肉

の策として当たり障りのない「朝鮮の人」という語が案出されたと述べている。朝鮮憲兵司令官の岩佐禄郎が出した『朝鮮同胞に対する、内地人反省資録』（以下「内地人反省資録」という資料がある。「内鮮融和」に反する日本人の言動を収録して「内地有識階級者の参考資料」とするために配布されたものだが、この資料でも、「朝鮮の人は『朝鮮人某』といふが如く『朝鮮人』と呼ばれ『朝鮮人』と書かれるのを喜ばない」とし、「かういふ事は人間の持つ感情であつて理屈ではない」と述べる⁽³⁾。そのために岩佐禄郎は呼称として「朝鮮人」を避け、一貫して「朝鮮の人」を用いている。

このように「朝鮮」という国の国民を意味する語がそのまま蔑称になり得たという不思議な事実は、まともな呼称を完全に失つた朝鮮の人々の理不尽な経験をそのまま物語っているように思われる。しかし「朝鮮人」とか「鮮人」は蔑称でありながら、同時になぜそれが蔑称なのかという曖昧さ、分かりにくさをいくらか含んでいることも事実である。その差別、侮蔑の痕跡は両者の心の領域にある不可視のものだからである。

『内地人反省資録』でも指摘されているが、一般的に朝鮮人を指す蔑称としてよく使われたのは「ヨボ」である。「ヨボ」は、「こちらをご覧なさい」、「もしもし」などのように人を呼びかける時に用いる朝鮮語の「여보 yeobo」から来ているが、後述するように、その意味するところは甚だ侮蔑的である。「朝鮮人」や「鮮人」に比べ、語の性格からしてどう見てもニュートラルとは言いがたい「ヨボ」という蔑称には、日本人の露骨な侮蔑の意識とそれに対する朝鮮人の悲痛な叫びが、文字通り、痕跡として残されているように思われる。

「ヨボ」という蔑称の存在については、いくつかの文章に簡単な言及はあるものの、それがどのような意味を持ち、どのように用いられ、朝鮮人にとってどのようなものだったのか、そしてどのようにして消滅したのかなど、いわば

「ヨボ」という蔑称

その実態についてはほとんど知られていない。本稿は、この蔑称にかかわる実態を明らかにすることを目的とする。

一 「ヨボ」とは？

「ヨボ」という呼称は、日露戦争の後、朝鮮が日本の保護国と化し、朝鮮に渡る日本人が急激に増えていく中で、多少の誤解と侮蔑の意識とが組み合わさることによって生まれたようである。朝鮮語の「요보 yeobo」の「yeo」は日本語にない発音で、日本人の場合は特段の注意を払わなければ、「ヨボ yobo」と発音してしまう。そこに、日本語にそれらしき言葉が存在するという偶然が加わる。これに関連する日本語について、松田甲『朝鮮叢話』（朝鮮総督府、一九二九年）には、次のような説明がある。

朝鮮の人が内地人よりヨボと呼ばれるゝを嫌ふことより連想さるゝは、古来内地にもヨボ及びヨボロと云ふ、語がある事である。即ち『倭訓栞』に

よぼろ 日本紀に丁字、膺字、古事記に仕丁を訓せり、脚力をいふ辞にて今いふ人足と同義なり。よて延喜式に運脚をハコブヨボロとよめり。日本紀に役丁をエヨボロ、軍丁をイクサヨボロ、荷丁をモチヨボロ、直丁をツカヘヨボロとよめり。

とある如きがそれで、而してヨボクレオヤヂと云へば、衰へたる老翁を指し、ヨボヨボと云へば、老衰してよろほひ歩む状を形容し、ヨボケと云ふも衰老のことを称しており、いづれにしても良き方に使はぬ語である。(傍点原文)

他の文献にも、日本語には「ヨボといふ語を、ヨボく」と重ねていふ副詞があつて、悠暢・弛緩・老衰・敗残・失敗者等を意味するが、朝鮮の人の態度が悠暢であるから偶然にもその悠暢さを形容する語」になつたという記述がある。⁽⁷⁾

管見によれば、「ヨボ」が初めて文献に登場するのは、薄田貞敬『ヨボ記』（日韓書房、一九〇八年）においてである。タイトルを『ヨボ記』としたのは、「ヨボ」の地の記録という意味からだろう。薄田は、朝鮮語の「야보 yeobo」は人を呼びかける語であるが、日本人の間で「老耄^{ヨボ}と嵌めた朝鮮人の代名詞」になつており、今や「老耄^{ヨボ}国^{こく}」という語まで「通用する時代」だと述べる。『ヨボ記』が刊行された一九〇八年頃には、すでに一般的に使われていたことが分かる。「老耄」⁽⁸⁾と書いて「ヨボ」とルビを振つたところに、老衰、悠長、弛緩といった当初の意味は過不足なく表れているが、実態はもつと複雑で、その詳細を理解するためには、当時の使用例を検討する必要がある。

『ヨボ記』に次のようなくだりがある。大きな荷物を背負つた朝鮮の男が、街の中の店先に飾り立てられたものや蓄音機の音色に心を奪われ、長煙管を加えて立っている。そのような「韓人共」に、「其の汚ない装束^{みせ}で往來の邪魔をするな」という意味で、「ヨボ」と、「尻上りに怒鳴り付ける」。すると、「土色に染また白い広服^ま引姿の韓人共は、『アイゴ』と、惶^{あわ}しく、脅^{おそ}えた目を振り返つて、ヨボく」と路を開く。身長の高い日本人が黒装束の鋭い格好で、針の様に其間を縫ふて行く。⁽⁹⁾ 蔑称としての「ヨボ」の起源を語っているようにさえ思われるこの記述は、いくらかごちなさを含んでいる。朝鮮語の「야보 yeobo」は本来上等語ではなく、使用範囲は「朋友、同輩間」もしくは目上の人から目下の人を呼ぶ場合で、日本語の「オーイ」に相当する言葉が言いにくい時に使用するものであつた。⁽¹⁰⁾ つまり、上等語ではないが、相手に対してある程度の礼を含ませた語と考えていい。この使用方法に基づくならば、先の例で、

「ヨボ」という蔑称

通行を邪魔するなど怒鳴りつけるのにこの語を使用するのはごちない。日本語ならば「おいこら！」とでも言うべきところを、「ヨボ」と言っているのだから、その意識や話の調子に比べて、礼が過ぎるのである。ところが、このようにごちなく、しかも日本式に（間違つて）「ヨボ」と発話する中で、日本語の「よぼよぼ」が想起され、それがいみじくも朝鮮人のある「特徴」を表す表現へと発展したと考えられる。まさに『ヨボ記』の著者が、日本人に怒鳴りつけられた後の朝鮮人の様子について、「脅えた目を振り返つて、ヨボくくと路を開く」と表現したように、である。

しかし「ヨボ」は、決して老衰して元気がない朝鮮人の表象という範囲に止まるものではなく、さらにそれが指し示す範囲も一定ではなかった。『ヨボ記』を見れば、朝鮮の人々を指す語としては「ヨボ」の他にも「韓人」、「朝鮮人」があり、必ずしも統一されていたとは言いがたい。また、朝鮮の既婚の男性だけを指す場合が多かったことにも注意が必要である。このことは、薄田貞敬・鳥越静岐『朝鮮漫画』（日韓書房、一九〇九年）にも認められる。既婚の男性を指す場合の「ヨボ」は、女性はもちろんのこと、未婚の男性を意味する「チョンガー」とも区別されるものである。漢字で「韓爺」・「爺」／「韓童」^{〔1〕}と表したのはその典型的な例である。「爺」という字が使われたからといって、必ずしも老人を意味するわけではない。では、長年続いた早婚の習慣によつて早く結婚した一三才、一四才ぐらいの「小さな大人」^{〔2〕}はどちらに分類されるのか。『朝鮮漫画』では、朝鮮の男性を「大ヨボ」・「小ヨボ」・「チョンガー」・「アイ」の四つに分類している。それぞれ、成年の既婚の男性・既婚の少年・未婚の青少年（大人の未婚者を含む）・小児に該当する。^{〔3〕}「ヨボ」は朝鮮人一般を指示対象とする語でありながら、同時に、家父長制度の下で社会を主導する既婚の男性を、未婚の男性や女性と区別する語でもあったのである。^{〔4〕}

よく言われるように、日本人は朝鮮人に対して様々なマイナス・イメージを付与した。^{〔5〕}蔑称の問題は結局のところ、

他者から与えられたマイナス・イメージと別個の問題ではあり得ない。彼らは朝鮮や朝鮮人について観察し批評することに貪欲であった。ツベスタン・トドロフは、他者を無性に認識したいと欲する気持ちをも「認識への渴き」⁽¹⁶⁾と表現したが、まさにそれであろう。ただ、その欲望に突き動かされてなされる認識は、決して正しい認識を意味しない。⁽¹⁷⁾自分たちのものさしで、好き勝手に認識してしまうことはいくらでも起こりうるからである。

朝鮮人のマイナス・イメージも、まさにこのようにして創られた。そのマイナス・イメージは、呼称が「朝鮮人」であろうが「ヨボ」であろうが、そこにこびり付いて離れない。そもそも他者に対する侮蔑的な言辞は、すでに用意されたマイナス・イメージを自動的に動員しそれに依存せざるを得ないからである。例えば、雑誌『朝鮮及満州』の主筆兼社長の積尾春仍は、一九一二年現在の「ヨボ」という語の中には「不潔、破廉恥、卑屈、姑息、頑陋、尊大、陰險、面従、背罵、然して理想無く、希望無く、操守無き結塊物」という意味が込められていると書いている。⁽¹⁸⁾非常に広範囲にわたっているが、これらはまさに朝鮮人に付与されていたイメージに他ならない。

『朝鮮漫画』に「牛下の昼寝」という項がある。

牛の下で昼寝するとはヨボでなくては出来ぬ芸だ、巧いことを考へたものなり、流石に朝鮮だ、蹴られるとか小便を浴びるとか云ふ取越苦勞に神経を悩さぬ処は、ヨボの豪い処なのだ。無頓着と言はふか、無神経と云はうか、韓人は怯懦なるが如くして、而かも死刑の場に臨んで、猶ほ平気で大茶碗へ手を入れて盛んに御馳走を食ふ。一ツ怒鳴られると、ヒリヒリして逃げるが、死と云ふ事を余り恐れぬらしい、想像力が乏しいから前兼ねて恐るゝ事を知らないのかも知れぬ。大失態を生じて譴責されても、ニタニタ笑つて居やうと云ふ低脳者の処も見える。然ればぞ、路傍に牛車を駐めて、夏の午後には牛の下に寝るのが、いと得意気である。牛もヨボ化して居ると

「ヨボ」という蔑称

見えて、柔順らしい。

(略) 由来不潔は、低脳、無頓着、気が利かぬから起る。⁽¹⁹⁾

ここに刻印されている「ヨボ」のイメージは、釈尾春仍の説明に比べてすこし限定的で、「無頓着」、「無神経」、「低脳」、「柔順」で、最後に「不潔」が加わる。

まとめて言うならば、「ヨボ」の意味は、日本語の「よぼよぼ」に含まれる「悠暢・弛緩・老衰・敗残・失敗者等」の意味を基本軸としてゴムのように伸び縮みし、各人によってすこしずつ異なる意味で使われたとみるのが妥当であろう。後述するように、朝鮮に渡ったばかりの日本人がわけも分からず、まったく侮蔑の意識もたずにこの語を使用することも珍しくなかったようである。しかし、すでにそれが蔑称となつて傷跡を作ってしまうと、どのような意味で使おうと、また侮蔑の意識がない場合でさえ、痛みを引き起こさずにはおかない。

二 「ヨボ」の矛盾

かの有名な朝鮮人の「喧嘩」の様子は、朝鮮人が「よぼよぼ」のイメージをもつ「ヨボ」たる所以を象徴するものだったと言つても過言ではない。早くも一八九四年刊行の本間久介『朝鮮雜記』に、朝鮮人の喧嘩は次のように描かれている。朝鮮人は何らかのことで争論を始め、盛んに「舌戦」・「議論」を展開し、和解の見込みがないとなれば、「双方共に其笠を脱ぎ、いざ来たれ組まんと、互に椎髭もろひげを握り合ひ、引きつ引かれつ挑み合ふのみ、江戸ツ子の捷すばやき喧嘩は絶えて見るべからず。」終いには「着物は破れた、償なえ、笠代いくら出せ」と目前の損害に対する賠償を求め

るのが常である。本間は、江戸っ子の喧嘩と対照をなすとして、このような「気楽」な朝鮮人の喧嘩に「国運否塞の徴」を見て取ったのである。⁽²⁰⁾

『朝鮮漫画』には、朝鮮人の喧嘩について微に入り細を穿った描写がなされている。

ヨボも気に食はないと喧嘩をする。長煙管を食へながら、風発卓の能弁で俺が々と三十分も一時間も言争ふ。口の喧嘩で滅多に手は出さない、睨み合ひ罵り合ひが長くて、見て居る我々は欠伸が出る。目を怒らし、腕を扼し、口角泡を湛へて、胸と胸と摺り合ふ位に体を寄せて擬勢を張る。宛かも猫喧嘩にも似たり。一時間も此の睨み合をやつては、やがて物別れになる、偶には、攫み合ひ押し合ひするものもあるが、単に押し合ふに止まり、拳を挙げて相撲つことは殆んど無い。高声に罵り合ふ中には、見物黒群りして、我関せず焉と悠悠互に火を貰ひ合つて長煙管を吸ふ。傍杖を食ふ心配の無い喧嘩だ。其中機で一二合胸倉を攫み合ふと仲裁が入る、すると、仲裁者を中立地として、双方の罵りと擬勢は一層活気を加へる。長煙管をば、左手に大事そうに捧げて、決して喧嘩道具にしない。二銭か三銭の行違から起る争論だから羅宇竹が折れたら損になる。勘定高い喧嘩だ。⁽²¹⁾

この喧嘩の主体たる朝鮮人は、何かの拍子で争論にはなつても、大切な衣冠を破りかねない殴り合ひの喧嘩などは避けたいのである。とすれば、「勘定高い喧嘩」であることに間違いはない。西洋人の記録にも、朝鮮人の喧嘩は高声で言い争いをし、結局、止めてくれる人を間に挟んで、すこし揉み合つて「鼻血を出すのが関の山」といった記述が見られる。日本人の中には、このような喧嘩を「文字そのままの喧嘩」、すなわち「喧しき口の華」と嘲る人も、また「男性的」でないと評する人もいた。⁽²²⁾

だが、柳田国男によれば、これに似たような「男」らしくない計算ずくの喧嘩は明治の中頃の日本でも盛んだった

「ヨボ」という蔑称

らしい。花見の時の喧嘩は新しい人間関係をつくる方便、つまり一種の社交術だったというのが柳田の見解である。地方から新しい職を求めて東京に集まった男たちは、しばしば花見の際に喧嘩をしたが、その喧嘩は止めてくれる人がいくらでもいるところで行われ、しかも「多くは酒盃と談笑をもつて終結」するものだったと言うのである。⁽²⁵⁾

だが、朝鮮人に関しては、かつての自国民に対して柳田国男が見せたような理解ある態度を期待するのは無理だったようである。いずれにしても、日本人が捉えた「気楽」で勘定高く、男らしくない朝鮮人の喧嘩の風景は、老衰して覇気のない「ヨボ」の像の具現と言つてよい。

一方、朝鮮人にはこれとまったく相反する傾向が見られたことも見逃せない。朝鮮には古くから「石合戦」の習慣があった。正式には「石戦」^{ソクヂェン}または「便戦」^{ビョンヂェン}と言う。旧正月の一月一日〜十五日に行う遊びで、一つの部落または一つの地方が二つに分かれて石を投げ合い、逃げた方が負けとなる。

『朝鮮漫画』には朝鮮人の喧嘩の項目のすぐ後に、「石合戦」についての詳細な記述が続く。

京城では城内と場外との石合戦が始まる、先づ双方城外の広場に会して相對陣する、双方親方があつて指揮もし、監督もする。双方百名近い人数が酒肴を携へて行つて相對陣して互に酒食する、(略)愈よ打合をなして石戦が始まると、之は又猛烈な合戦だ、先づ互に手頃の石を投げる、負傷者はいくらかも出来る、平素は口論ばかりで滅多に手出しもせぬ怯懦^{きょうだう}と見える韓人が、此の時の勇敢無鉄砲と来ては凄まじいもの、やがて双方接近して入り乱れるの合戦になると、彼等は上衣の下へ隠して居る二尺ばかりの棒を持つて相搏撃する、鮮血迸る位は何とも思はない、脳天を割られて死ぬ者もある。今年は警官が干渉したら韓人巡查を縛り上げて置いて石合戦をやつた。

非日常とはいえ、「ヨボ」と呼ばれる朝鮮人にはまったく似つかわしくもないこのような激しい行為は、日本人の中

の朝鮮人像に揺さぶりを掛け、亀裂をもたらすには十分だったと思われる。しかし、石合戦は一九〇八年に日本によって禁止された。⁽²⁶⁾日本人が持つ危うい朝鮮人像はこうして政治と武力によって維持された面がある。

三 「ヨボ」という語の氾濫

上記の多数の引用文からも分かるように、「ヨボ」の語の流行に最も大きく貢献したのは、薄田貞敬の『ヨボ記』と薄田貞敬・鳥越静岐『朝鮮漫画』であり、その次に雑誌『朝鮮及満州』とその前身である『朝鮮』を挙げることができる。一例として、書名に「ヨボ」を掲げた『ヨボ記』を見ると、「ヨボ」の使用例は、「ヨボ」「ヨボ君」「老_ボ君」「老_ボ国」「老_ボ生活」「老_ボ家屋」「老_ボ臭い」など多様であり、さらには「老_ボしい邦」という形で新造の形容詞まで登場する。もう一つ、動詞として「老_ボける」「老_ボ化する」がある。「よぼける」は近世日本語で「年を取ってよぼよぼする」という意味だが、『ヨボ記』では端的に「ヨボ」のようになるとか、「ヨボ化」という意味で使われている。

上記の文献において、朝鮮人は多くの場合、特別な説明なしに「ヨボ」という名で呼ばれるが、すでに述べてきたように、その意味について『ヨボ記』や『朝鮮漫画』では著者が自覚的であることが明確にされており、『朝鮮及満州』でも釈尾春苧が明記している。従って、これらの文献における「ヨボ」は、朝鮮人がそれをどう受け取るかという問題以前に発話主体の意識においてすでに蔑称だったと見なすべきだろう。

一つ例を挙げたい。次の文章は統監府時代の保護政治のあり方に不満を持った釈尾春苧がその怒りと朝鮮人に対す

「ヨボ」という蔑称

る侮蔑の意識を織り交せて書いたものである。

韓国指導の大権を握れる韓国の統監は韓皇の命ずる儘、南に北に随行して更に恠まれず、韓国に傭聘されたる大
小幾多の我官吏は韓皇を陛下陛下と敬ひ奉りて我 天皇に対すると撰ぶ無し、甚しきは臣と称して有難がるに至
る、又甚しきは韓国の衣冠を着するも猶ほ且つ敢て意に介するに足らずとせらるゝ大悟徹底論を拜聴するに至り
たり、(略)地方によりては日本人主事又は日本人警部がヨボ觀察使の靴の紐を結び、日本巡査がヨボ郡守の便器
を持参する人ありと云ふ(略)

大韓協会は韓国政府に質問書を提出して曰く、日本人と雖も韓国政府に傭聘されたる以上は韓国人民と同じく韓
国皇帝に対して臣下の例を取るべき筈なり、然るに聞く所に依れば日本官吏にして臣と署せざるものありと、是
れ官紀紊乱にあらずやとの大々的質問書なり、ヨボ共の意気込み何ぞ其れ猛烈なるや、⁽²⁷⁾

この引用文の二倍程度の長さの短文ながら、「ヨボ」が七回も出てくる。当時の朝鮮人には強烈な印象を与えたと推
察される。

『朝鮮及満州』には、この蔑称の流行に堪えかねた石鎮衡^{ソクジンヘン}という親日的な人物が日本人に反省を促す一文を寄せてい
る。石鎮衡は東京留学の経験を持つ法律学者で、一九一二年現在、京城専修学校の教諭を勤めていた人物である。⁽²⁸⁾石
は次のように述べる。日本語が分かり、日本の習慣や日本人の性質が分かる自分でさえ、「ヨボ」と言われれば、その
「瞬間に於て顔に熱火を注ぐが如き感を催」す。当然、日本の言葉や習慣などをまったく知らない一般の朝鮮人は「ヨ
ボ」という語を聞いて「何も彼も皆自分を悪く謂ひ、又は嘲弄するものと考えへて悪感を懐くに至る」のが「普通」で
ある。それなのに、

朝鮮人として文字を読む者、朝鮮に於て発行する国語（日本語―引用者註）新聞を読むときは「ヨボ」の文字に接せざる日はなく、国語雜誌を読むときは一頁に「ヨボ」と云ふ語を少くとも二三以上を記載しあるを見、書籍店に往くときには別に「ヨボ」と云ふ文字を附けたる著書を見、或場合には面前に於て此の語を謂はれる時も多し、朝鮮人は此の文字に接し、或は此の語を謂はれたる時には必ず胸に異感起るを覚ゆ。⁽²⁹⁾

最終的に石が言わんとするところは、「陛下の赤子たる旧新の臣民」が「相和睦し、相親善して陛下の大御心に背かざらんことを期すべき」なのに、何故に「ヨボ」のような「無用の語」を使用して仲を悪くするのかということである。⁽³⁰⁾これに対する反論として釈尾春仍が書いたのが、「ヨボ」の意味について述べた先の文章である。釈尾は日本人が「ヨボ」と言う場合、「輕侮、嘲弄、侮辱」の意味、具体的には「不潔、破廉恥、卑屈、姑息、頑陋、尊大、陰險、面従背罵、然して理想無く、希望無く、操守無き結塊物」という意味を含んでいると述べながらも、むしろ、そういった意味の蔑称である「ヨボ」を使用する日本人の反省を求めた石鎮衡を批判した。すなわち、朝鮮人が「ヨボ」という語を不愉快に感じるのは、「ヨボ」それ自体が侮辱的だからではなく、朝鮮人がそういった性質をもっているからに他ならない。従つて「石君」は、日本人に反省を促すのではなく、「先づ朝鮮人を鞭撻奨励して其心性を淘汰し、其汚俗野習を改善し、其民を文明化し、其社会を日本化すること」、「ヨボ臭を脱することに努めよ」と言うのである。⁽³¹⁾

結局、両民族の「和睦」と「親善」を図るためには「ヨボ」の使用について反省しなければならないという石の親日的とさえ言える要請は、釈尾の極端な不寛容の姿勢によつて退けられた。この後も、「ヨボ」は朝鮮人の民族感情を逆撫でするかのようになり、相変わらず盛んに流布した。そのことを最もはっきりと示しているのが『内地人反省資録』である。この文献には反省すべき日本人の言動について六八件の事例が収録されているが、そのうち四一の事例に「ヨ

「ヨボ」という蔑称

「ボ」が使われている。その中から事例をいくつか紹介しておこう。

- ①「現金を支払へ、朝鮮人に預金なんかあるものか、お前の小切手なんか眉望ものさ、ヨボの癖に」
- ②「府内〇町〇丁目〇〇番地 古物商 ヨボ」とのみ書いて発送
- ③「床屋」「なんだヨボか汚い奴ぢや器具の入手をよくして置け、実際朝鮮人は内地語が少し判ると実に生意気だ」
- ④「火事を知らせるサイレンを聞き、火の手を指して駆けつけた五人連れの日本人が、「なんだ、ヨボの家か？」
と言つて引き返す。

⑤（生死の境にある産婦について）「手術に要する費用として不取敢三十円を持つて来なければヨボの往診は出来ぬ」

⑥（床屋）「おいヨボお前は後にしろ俺が先にやる（。）お前達朝鮮人は何時でもよいではないか」

⑦（待合室で空席がないのを見て）「ヨボく、其処を退け」

⑧（映画館）「ヨボはヨボ同志座するようにしてゐる」⁽³²⁾

「貴族」も例外ではない。次のような逸話がある。

総督府のある大官に朝鮮のある貴族から電話が掛り、女中が取次に出たが、其大官が女中に「誰だ？」と尋ねると、女中は受話器を握つたまま「ヨボからですよ」と答えた。ところがそれが送話器から相手の貴族の耳に伝はり、以来その貴族は大官を信じなくなつた。⁽³³⁾

「ヨボ」がいかに日常的に使われたかが分かる。同時代の小説の中にも、チゲクン（「チゲ」は朝鮮の背負子で、チゲを使った荷物運びを業とする者をチゲクンと言う）が日本人から「ヨボ、バカ」と罵られる場面⁽³⁴⁾、朝鮮の子どもが

日本の子どもに「ヨボ」とからかわれる例など、多数の例が見られる。⁽³⁵⁾

この語が流布する契機には、もう一つ、日本人が朝鮮人のようになってしまふという危機意識があった。「老耄ける」^{ヨボ}「老耄化する」という語についてはすでに述べたが、これとは別に「ヨボ化」という語がある。在朝日本人が朝鮮人化する⁽³⁶⁾ことを戒める時の警句としてよく使われた言葉で、一種の流行語になっていたと⁽³⁶⁾言う。例えば、オンドルのある家屋に起居して「鮮人的性情の感化」を受けるとか、「陋矮にしてドス黒い温突に生息しつゝある間には自然に卑屈になり人の下」に立つことに甘んじるようになる⁽³⁸⁾といったことが、「ヨボ化」という警戒すべき事態として論じられた。これらの例からも分かるように、韓国併合前のおおむね否定的だったオンドル観も手伝って、「ヨボ化」はしばしばオンドルの部屋で暮らすことと関連づけられた⁽³⁹⁾。上記の二つの例からは、オンドルがどういふ人間を養成する⁽³⁹⁾のか曖昧だが、オンドル生活は「蟄居生活にして進取の氣象を消磨せしむる害毒」であり、穴に蟄居する⁽⁴⁰⁾ような「安易」を貪るのは「墮落頹化の原因」⁽⁴⁰⁾だとするオンドル観が反映されていたと思われる。「ヨボ」が大変広い意味を持つ語であつたため、とにかく「朝鮮人」のある特徴を想定し、その朝鮮人のようになることを指して「ヨボ化」と言うこともあつたと考えられるが、基本的にはやはり、無気力で進取の氣風がなく怠惰な人間になることなどを意味していた。また次の引用文に見るように、「ヨボ」がそうだったのと同じく、取り立てて説明をしなくても「ヨボ化」と言えばなんとなく意味は通じてしまふ。

正大の氣象と高雅の情操と偉大の事業と、非凡の思想と天才とは、未だ朝鮮半島より産出したるを見ず、是れ朝鮮の天然の然らしむる所なるか将た人事の罪か、朝鮮の天然と人事は凡てをヨボ化せんとするにあらざるか、朝鮮の産出物は凡て平凡なり、朝鮮の山河と社会は亦凡てを平凡化するにあらざるか、朝鮮を以て第二の故郷とす

「ヨボ」という蔑称

る我日本人は大に此問題を研究しヨボ化を防ぐ道を講ぜざるべからず。⁽⁴¹⁾

このように「ヨボ」や「ヨボ化」が何の説明なしに使われても意味が通じてしまうというところに、社会におけるこの蔑称の広がりを確認することができるだろう。

四 「ヨボ」が与える侮辱感

前述の例から見て、「ヨボ」が朝鮮人に侮辱を与える語であったことはすでに明らかだが、ここではそのことをもうすこし突き詰めて論じておきたい。

ある小説を見ると主人公の女の子が、自分は「ケジベ（女の子を軽く言う言葉——引用者註）と言われるのが、誰かに「ヨボ」と言われるのと同じくらい嫌だった⁽⁴²⁾」と言っている。ここで言う「誰か」が日本人であることは言うまでもない。小説の事例ではあるが、現実を反映しているという意味で、いかに「ヨボ」という語がいやがられていたかを物語っていると見えよう。

雑誌『開闢』のある記事は、鉄道の「咸鏡線」の開通を喜ぶ山間の農民たちに言及し、鉄道の開通が彼らには百害あつて利はないだろうと言う。例えば、日本の商品の流入によってポケットの中のわずかな小銭を吸い取られ、「ヨボ」と言われる機会も増えるだろう、と言う。⁽⁴³⁾ 鉄道が開通すれば、「ヨボ」と言われる機会が増えるというのは飛躍しているようにも思われる。しかし、鉄道によって日本人の姿が増えれば、当然、日本人から「ヨボ」と言われることが多くなるというのが、この雑誌記者にはまったく自然な思考であり、「ヨボ」という蔑称は、それだけ朝鮮の知識人の思

考において重要な要素だったということに他ならない。

さらに同記者は、過去に満員列車に乗ろうとして、「ヨボサンハノラナクデモイイジャナイカ」と三人の日本人女性客から一斉に言われて涙が出そうになったことがあるとし、以前日本の子どもから「ヨボサンガニドウニノツタヨ」と言われたことを思い出して怒りがこみ上げてきたと述べている。滑稽にも蔑称の「ヨボ」に「さん」付けをして「ヨボさん」と言われたわけだが、受け取る方にとってはさほど違いはなく、この蔑称は、乗車の資格や優先権にかかわる差別的言辞と相まって堪えがたい侮辱感を与えていたのである。

ここで「ヨボさん」について簡単に補足説明をしておきたい。「ヨボ」の使用例については前の方でもいくつか紹介したが、他にも「ヨボの先生」、「ヨボの学校」、「ヨボの野郎奴」⁽⁴⁴⁾、または「ヨボの役人」、「ヨボの車屋」⁽⁴⁵⁾などきわめて多様であった。ひいては、特定の物を売り歩く朝鮮人を指して「野菜ヨボ」、「卵ヨボ」、「薪ヨボ」⁽⁴⁶⁾などと呼ぶこともあった。「ヨボ」に「さん」を付けた「ヨボさん」はその中でも特異だが、前述の例からも窺われるように、子どもや女性がよく使っていて、一応敬語ではあるものの、同時に蔑称でもあるという矛盾を孕んでいた。ある資料では、その辺の事情をこう説明している。

電車内で「ヨボさん降ろして下さい。ちよつと待つて下さい」といふのを屢々聞く、来訪客の前でも、「ヨボのお客さんが入らした。」といふ家庭さへある。これらの人は無知でいつてゐるので決して悪意はないが、軽蔑の意味にも使つた歴史があつたので、これをいられると甚だしく不快に感ずる。⁽⁴⁷⁾

つまり、侮蔑の意識なしに「さん」を付けて使つても、「ヨボ」は侮蔑の意味から自由ではあり得ないのである。もう一つ事例を紹介しよう。

「ヨボ」という蔑称

京城市内の電車に、内地の奥さんが子供を伴れて乗つて来て、電車の中で子供が帽子を落したのである。すると乗合した朝鮮の紳士がそれを取つて、親切にも子供に被らして呉れたので、其の奥さんは子供にむかひ、「御前、ヨボさんに御礼を申しなさい」と言つた。其の紳士は其の言葉を聞かや否や、真赤となつて怒り出し、到底堪へきれないと見えて、次の停留所に着くのを待兼ねて降りて仕舞つたそうである。⁽⁴⁸⁾

中学生時代を朝鮮で過ごしたところのある中島敦の短編小説「巡查の居る風景」にも、これに似たような電車の中の風景が描かれている。一人の日本人女性が朝鮮人の青年に「ヨボさん」と言つて空いた席を勧めるのだが、青年は怒つて「何だヨボとは。ヨボとは一体何だ」と抗議をする。女性は何も分からず、「ヨボ」ではなく「ヨボさん」と言つたじゃないかと反論するが、青年は「どっちでも同じことだ。ヨボなんて」と言つて怒りが収まらない。⁽⁴⁹⁾

以上、「ヨボ」が朝鮮人にどれだけ侮辱を与える語であつたか、そしてある種の誤解から、時には「さん」付けをして何気なく使つても、「ヨボ」が侮蔑の意味から自由ではあり得なかつたことなどについて述べてきた。

もう一つ付け加えるならば、「ヨボ」が朝鮮人同士でも問題になることがあつたということも、「ヨボ」という蔑称の問題の広がりを示している。呼びかける語としての朝鮮語の「여보 yeobo」を、侮蔑の意識もなく、しかもそれにふさわしい場面で正確に発音すれば、いざこざは起らないはずだが、次の資料を見れば、必ずしもそうでもなかつたことが分かる。

私の実見した例であるが、洋服を着た朝鮮の官吏が朝鮮の馬子に向つて「ヨボ」と呼びかけた。馬子は洋服に着慣れてゐるので、或は内地人であると信じたものか、「ヨボとは何だ。」と忽ち喰つてかゝつたのを見た。洋服の人はもとよりお手のものであるから、陥々と鮮語を以て弁解に力めたが、なほく双方共長時間論じ合つて

ゐた。⁽²⁰⁾

これもやはり朝鮮人が「ヨボ」にいかに敏感に反応していたかを物語っていると見えよう。

五 「ヨボ」のうちの「ヨボ」

「ヨボ」が朝鮮人一般を指すと同時に、既婚の男性を指す語でもあったことについてはすでに述べたが、さらに「ヨボ」は限定的に、無知で断髪をせず昔のままの格好で暮らすなど、いわば時代に取り残された朝鮮人男性、または洗練されていない下層の朝鮮人男性などを意味する語としても使われた。先にも触れた積尾春仍の言葉を借りるならば「ヨボ臭」を多く留めている朝鮮人男性ということになる。この場合の「ヨボ」の定義はたいへん難しく、その意味が流動的であるところに特徴がある。

廉想渉の小説「万歳前」に描かれている船の三等室の風景を見てみよう。⁽²¹⁾ 三等室に乗った「私」は「二等室」に乗るはずの自分が三等室に乗ったことについて、金の使い方が荒くていつも余裕がないことと、すこしでも金を浮かしてお茶でも飲みに行きたいという考えもあって、「無料宿泊所」のような三等室で夜を明かすのだと語る。その場にふさわしからぬ存在である「私」は「三等室に集まった人種」を突き放して観察し、批評する。「私」によれば、その「人種」は身なりから見ても言動から見ても明らかに「下層社会の餓鬼窟」であり、たまに「下層官吏の端くれ」が混じっている。「私」はその「人種」を頭の中では「無産階級」として大切だと考えるが、実際には極力近づくことを避け、向かい合うと気にくわないので顔をしかめ、感情的には融合できないのだと言う。食事をしようと船室に行くとは何か

「ヨボ」という蔑称

騒ぎがあるらしく人だかりができています。見てみると、下層官吏と思しき人物が順番を無視して椅子に座って、食事を出せと強情を張り、船員はそれを拒んでいる。すると、その下層官吏と思しき客は、自分を「ヨボ」だと思ってこんな扱いをするのか、と怒る。その客は「三等室に集まった人種」の中から自分を除外して、その「ヨボ」たちと自分を同じ扱いするのかと異議を唱えていたのである。しかし、そういう彼も、作中の「私」³²語り手の意識においては、どうしても感情的に融合できない。「三等室」の「人種」、すなわち彼自身の言葉を借りて言うならば、「ヨボ」ではない。近代化の洗礼を受けて身なりや考え方などが大きく変化していく中で、昔の朝鮮人の面影や性質、つまり「ヨボ臭」をより多く留めている存在が、「ヨボ」のうちの「ヨボ」として、差別化されていたと言えよう。

もう一度、釈尾春仍の石鎮衡への注文を思い起こしてみよう。釈尾は「先づ朝鮮人を鞭撻奨励して其心性を淘汰し、其汚俗野習を改善し、其民を文明化し、其社会を日本化すること」、「ヨボ臭を脱することに努めよ」と要請したわけだが、「ヨボ」の中に今述べてきたような線引きを行う主体は、この要請通りに「文明化」し、「ヨボ臭を脱」した存在として自己認識する主体である。前述の雑誌記者は、日本人から「ヨボ」と言われることが自分より多いであろう「農村の兄弟」、「国境の兄弟」、「学のない兄弟」、「全朝鮮兄弟」を想い同情を寄せたが、このことは、朝鮮人だけでなく日本人も「ヨボ」のうちの「ヨボ」を特別に差別化していたことを示唆している。

では、例の下層官吏と思しき人物のような境界的な存在はさておき、「ヨボ」のうちの「ヨボ」として差別化される人々の意識はどうだったのだろうか。これについて明らかにするための資料は十分に持ち合わせていないが、廉想渉の小説「万歳前」はある重要な一面を教えてくれる。列車の中で「私」は隣り合わせた男（「ヨボ」のうちの「ヨボ」と言っているような男）と会話を交わしている。

「そんなことはありません。田舎で散髪しようとするれば、もっと面倒だし金もかかりますよ。……それに断髪にすれば、あなた達みたいに内地語ができて、新時代の学問も必要です。断髪にしたのに、内地人に会っても何も答えることができないようだと官庁に行ったり巡査に会ったりした時など、余計に面倒なことが多いんです。このように網巾マシゴシ（まげを結う時に頭髮が乱れないように頭に巻き付ける馬の尾の毛でつくった網目状の帯状頭巾——引用者註）を被つていれば、へヨボへだということで、だめなところがあつてもある程度のは許してくれるから、それだけでも断髪にしない理由にはなるでしょう。」

と言つて、からからと笑つてしまふ。

「でも、同じ朝鮮人どうしても背広を着、ステッキでも振り回していれば、待遇が違ふように、やはり断髪にしておけば、あの人達（日本人——引用者註）から冷遇を受けることが少なくて済むではありませんか。いつまでもやたらと当たり散らすのにまかせてべこべこして、へヨボへと言われ続けるつもりですか。」

「私はこのように聞いてみたのだが、男は、断髪にして帽子を被り、ステッキでも持つて歩いていたら、どこへ行つても苦しめられ、びんたを喰らい、頻繁に留置場に入れられるから、「ヨボ」と言われ冷遇を受けるとしてもその方がましだと言ふ。⁽³³⁾つまり、中途半端に「ヨボ」の呼称や冷遇から逃れようとして余計に苦しめられるよりは、「ある程度」のことは許して」もらえる「ヨボ」のうちの「ヨボ」という位置に甘んずるといふわけである。いわば札付きの「ヨボ」として扱われるという侮辱に耐えなければならぬが、しかし同時に「ヨボ」は、彼らが強かにも庇護を求めて選択する方便でもあつたと言えよう。

次は Modern Yobo としての「モボ」について簡単に触れておきたい。

「ヨボ」という蔑称

いわゆる近代の洗礼を受けた一部の朝鮮人が「ヨボ」の集団の中に、内なる「ヨボ」を見いだしていたことはすでに述べたが、貴族も官吏も知識人も、それぞれ「ヨボ」と呼ばれる頻度の差こそあれ、彼ら自身所詮は「ヨボ」ではない。

次の引用文は蔡万植の小説の一節で、人物SとKの対話である。

ジョンジャオクを出て、ジンゴゲ（南村とも言われた日本人商業地域——引用者註）にさしかかった。二人の前を新女性と洋服姿の男が並んで歩いている。

どことなくぎこちない。

「お前も俺も、ヨボがジンゴゲには何の用だろう！」と言って笑う。

「でも、俺たちはいい方だよ（略）サントウ（結婚した男が髪を結び上げ、頭のとっぺんで結んだまげ）男なら見事なんだけどね。」⁽⁵⁴⁾

ジンゴゲという空間において、どこかぎこちなく浮いて見える自分たちに対する自嘲、そして今ジンゴゲに立っているのが、自分たちではなく「サントウ男」という札付きの「ヨボ」だったならば、アンバランスの極致だろうという朝鮮民族に対する自嘲である。小説はこう続く。

「あれはモボだね。」

Sが見ると、確かに服装や体つきからしてモボと思われる一人の男が前を通り過ぎていく。

Kは眼に苦笑いを浮かべながら、

「そうモボはモボだね（略）ただし、朝鮮の野郎のモボは Modern Yobo という意味のモボだよ、ハハ。」⁽⁵⁵⁾

一九二〇年代の日本で、西洋文化の影響を受けて新しい風俗や流行現象を見せた先端的な若い男女に対する嘲笑的な表現として「モボ Modern Boy」・「モガ Modern Girl」という言葉がはやったが、それは朝鮮でも見られた現象である。Kは、ジングゲという他者の空間に現れた「モボ」が朝鮮人であることを見抜き、「Modern Yobo」という言葉で、「モボ」も所詮は「ヨボ」でしかないことを皮肉つたのである。このくだりは、李ギョンフンが指摘したように、「ヨボ」と「モボ」の対立が実は虚構かも知れない」という問題意識を表している。⁽⁵⁶⁾また、「内地人」という他者から与えられた「ヨボ」という呼称をもって、朝鮮人が自ら、他者の空間における浮いた存在として自嘲気味に自分たち植民地民の主体を捉え直したとも言えるだろう。

六 「内鮮融和」と蔑称

ここでは「内鮮融和」の問題について簡単に述べ、蔑称の問題と関連づけていきたい。

政治家をはじめとして近代日本の中核を担った日本人の多くは日本の朝鮮統治が平和に、そして永久に続くことを望んだであろう。だが、彼らはしばしば日本の利益と朝鮮民衆の幸福の両方を図るといふ詭弁に近い論理を展開した。例えば、韓国併合当時の『東洋経済新報』の社説は韓国併合について次のように述べた。

吾輩は帝国の発展として之を祝すると同時に、更らに改めて我国民に向て此重大なる責任に対する十分の自覚を望まざるを得ず。自覚とは何ぞや、他なし。今回の合邦が独り我国民の為に策せられたるに非ずして、全世界の平和の為に策せられたる者なること、及び独り我日本人民の幸福の為に決行せられたるに非ずして、実に

「ヨボ」という蔑称

朝鮮民[▽]人の福祉[▽]の為に決行せられたる者なることを、上下共に十分に領解することはなり。⁽⁵⁷⁾

本音かどうかはさておき、こういった論理は彼らの平和で永久的な朝鮮統治という期待を継続的に脅かす構造的な問題を孕んでいた。日本の利益のない統治は根本的に成立せず、また朝鮮人の幸福をある程度まで実現しなければ、安定した統治は困難になるわけだが、この二つは「度」を過ぎれば、互いに衝突してしまう。その意味で、日本の朝鮮統治の課題はこの二つの間で上手にバランスを取ることだったと言えるだろう。この課題を成功させたならば、「内鮮融和」はスローガンにならなかつたにちがいない。

一九一〇年代の「融和」は、主として朝鮮内における朝鮮人と日本人の関係向上を意味しており、まださほど大きな問題にはなっていないが、問題の重要性は十分に認識されていた。

当時李王職次官だった小宮三保松は次のように述べている。

露西亞や独逸が、ポーランドを分割して却てポーランド人から仇敵視され、今猶ほ手古擦つて居るのは、畢竟彼等がポーランド人に幸福を与ふと云ふ手段に重きを置かずして、彼等の反抗心敵愾心を鎮圧除去することのみを心力を尽し、彼等波蘭人をして少しも仁政と云ふことに感泣せしめないからである、即ち同化と云ふことに意を用ひずして、単に威伏威圧と云ふことに全力を注いで居るから、何時まで経つても融和と云ふことは出来ない、互に相疑い、相敵視して、隙許り窺ふて居る。全く爆発物を自分の屋敷内に運んで来た様なものである。(略)折角自分の物にして絶えず其れが為め心配を増す許りで何の得る所も無いとは誠に愚な話である。吾日本も朝鮮を併合した為め、却て心配許り増す様な結果になつては、其れこそ併合は却て国家に禍することとなる。⁽⁵⁸⁾

朝鮮を日本の中の「爆発物」としないためには、露西亞やドイツを反面教師として「親善融和」を図らなければな

らないという小宮の見解は、朝鮮統治の初発の段階から融和がいかに重要な課題だったかを物語っている。

小宮は主として政策的な観点から朝鮮問題を見ていたと思われるが、政策以上に重要なのは、在朝鮮日本人の態度であつた。「親善融和」のためには当然日本人のモラルの高さが求められる。しかし、本国で碌に職に就けない者が一攫千金をねらつて流れ込みやすい植民地（または植民予定地）でそのような高いモラルは期待できない。以下、韓国併合の頃までの、在朝日本人のモラル批判の例である。

在朝日本人のモラルについては、早くも日清戦争前の一八九三年から問題にされている。次の引用文は、当時朝鮮の実状を分析した末永純一郎の文章である。

畢竟居留民の七八分までは仮令へば対州や五島辺、但しは馬関広島島の漁民或は大工左官と云ふ種類の徒渡航して無智蒙昧なる韓人に対して種々の手段を用ゐて漸く一軒の店を構へ、茲に商人らしくなりたと云ふものが多い、其の例一を挙げれば、韓人は金銭の蓄へがないのと、借りて返さぬと云ふ横着な根性があるので、非常に金銭を欲しがり、貸しさへすれば幾何でも借ると云ふのです、ソコで意地悪き居留民は不動産や、貴金属杯確実なる抵当を取りて驚く可き高利の金を貸す、其中には利が十日一割など云ふがありて利が利に積み三ヶ月にて元金丈の利息を挙ぐると云ひ、期限が来れば抵当を用捨もなく引揚ぐる（。）ソコで紛議が起る、紛議か起りても約束なれば致方がないので、何時も債主の勝となり、韓人は不平たらしく所持の地面杯を引渡すことになる、此高利貸の弊は領事館の詮議に困り、目今の京城にて地所の質入は、今日では公然たるもので、韓城府の登記を経て契約すると云ふ手続きになりて居るので、即ち土地所有権を公許して居る事実があります、右申したる外、「ニツケル」の時計に金「メツキ」をして売附けたり、廢物になりて居る機械を譲渡したり、斯る例しは數ふるに違ない位で、

「ヨボ」という蔑称

韓人は漸く欺かれたるを覚るに及びて、一人伝へ、二人伝へ、誰云ふとなく日本人は油断のならぬ奴原であると云ふ感情を懐くやうになりましたのである。⁽⁵⁹⁾

次は、政治家の島田三郎の指摘である。

朝鮮人が日本人を直接見るのは其居留地在住のものである。不幸にして此等日本人は最も恐る可きものとして朝鮮人に知られて居る、此の如き者が日本人を代表すると彼等が思惟するならば、同化の実は蓋し容易に挙がらぬであらふ。夫れ故私は先づ親愛親交の精神を居留地人民に鼓吹し、正義公道の念を持つ様に伝導して貰ひ度いと希望する。⁽⁶⁰⁾

最後は、洪沢栄一の批判である。洪沢は、一部の愚かな日本人の乱暴な振る舞いのために朝鮮人の日本人に対する「怨嗟の声」が高まることを憂慮している。

今後内地人は彼等に対するに同胞の情を以てし、何処までも之を愛護指導して行くと云ふ態度を取らなければならぬと思ふ。而るに従来内地人の彼等に対する態度を見るに、動もすれば空威張を事とし、内地では碌でもない人間も、鳥なき里の蝙蝠で、朝鮮人を見ることが土芥どがいの如くであつた。斯こんな調子でやつて行けば、今後幾年を経るも彼等の信服を得ることは出来ないのである。⁽⁶¹⁾

「ヨボ」という蔑称が日常的に使われたことも思い合わせるならば、暴力性と不和は常態化していたと言えるだろう。「融和」はこういつた状況から生じる両民族の問題を事後的に治癒しようとする意識が込められた概念で、安定した朝鮮統治を願う限り、彼らが継続的に追求せざるを得ない価値であつた。ここに挙げた小宮、末永、島田、洪沢の指摘はすでに「融和」の必要性を説いたものと言つていいが、「融和」が本格的に唱えられるきっかけとなつたのは、やは

り一九一九年の三一独立万歳運動と一九二三年の関東大震災における朝鮮人虐殺事件である。

このような状況において「融和」の主張の一環として、「ヨボ」の使用の反省を求める声が出始める。後の『朝鮮風土記』(上)の言葉を借りるならば、日本人が朝鮮人を「ヨボと呼ぶことが日鮮融和を長いこと阻害してきた」という認識があったからである。一九二四年の「内鮮融和に関する一考察」という文章を見ると、「融和」を阻害する様々な問題を取り上げた中に、次のような逸話が紹介されている。筆者が辰巳劇場へ「安来節」を聞きに行ったところ、舞台上に朝鮮服を着た朝鮮人の若者が出てきた。番付にも「金某」とあり、自ら「私は朝鮮人であります」と前口上を述べていたから、彼が朝鮮人であることは明らかであった。その男が「安来節」を歌い始めると、日本人が「ヨボうまい」とやじった。筆者は、この逸話を紹介した後、次のように述べている。

驚く勿れ、之が内鮮人の融和を害する最大原因であるのである。鮮人は、内地人からヨボと称されることを非常に嫌つて居るばかりでなく、大なる侮辱と心得て居ることを注意しなければならぬ。(略)

(略) 若し傍聴者に鮮人が居つたとせば、此等の鮮人の内地人に対する恨みは如何ばかりであらうか。真に夫れ、骨髓に徹するの思あるを察しなくてはならぬ。之が鮮人間に次から次へと伝へられ、遂に一般鮮人が、一般内地人に反感を抱くに至るであらうことは、洵に見易き理であつて、茲に内鮮人の融和を妨げ、延いては彼等の独立心を醸成し、爆裂弾を弄する手段に出でざるを得ざらしむるに至ることを憂慮するのである。⁽⁶³⁾

「ヨボ」の使用の問題の深刻さがよく表れていると言えよう。しかし、このような憂慮にもかかわらず、ことはなかなか改善されず、この後もいろいろな文献がこの問題に言及している。一九二八―一九二九年に朝鮮総督府から刊行された松田甲の『朝鮮漫録』と『朝鮮叢話』が「ヨボ」の意味や問題性について述べて注意を求めており、一九三〇

「ヨボ」という蔑称

年に刊行された師尾源蔵の『新朝鮮風土記』では「ヨボ」の問題に言及し、「この難癖のついた『ヨボ』の語を、内地人は一切やめてしまつて、あなたと云ふ語句『当身』^(タシケン)を普及させて内地人に使用」させることを勧めている。⁽⁶⁵⁾ 以上のような動向を含めて、「ヨボ」の使用に関連して「各種の宣伝が屢々行はれた」と言うものの問題は改善されず、⁽⁶⁶⁾ 「内鮮融和」を阻害する「ヨボ」の使用に関する啓蒙は続く。⁽⁶⁷⁾

この後戦時期に入ると、「ヨボ」に関する記述が見られるのは、管見によれば、一九四二年に刊行された『朝鮮風土記』(上)だけである。この本には、「今日は少しは改つたであらうが、以前内地人は朝鮮の人を「ヨボヨボ」と言つてゐた」とあり、表現が曖昧であるため、当時の実態を把握するには不十分である。ただ、ほとんど論じられることがなくなったということから、「ヨボ」という蔑称は、「内鮮融和」・「内鮮一体」のスローガンの下で徐々に消滅していったものと考えられる。

よぼよぼ

本稿では、「もしもし」のような呼びかけの語である朝鮮語の「여보 Yeobo」に由来する「ヨボ」がどのような意味を持ち、どのように用いられ、朝鮮人にとつてどのようなものだったのか、そしてどのようにして消滅したのかなど、「ヨボ」という蔑称の実態について論じてきた。本稿で述べたことをまとめれば、以下の通りである。

「ヨボ」は、日本語の「よぼよぼ」に含まれる「悠暢・弛緩・老衰・敗残・失敗者等」の意味を基本軸としてゴムのように伸び縮みし、各人によつてすこしずつ異なる意味で使われたが、ほとんどの場合侮蔑意識をもつて使われた。

朝鮮に渡ったばかりの日本人がわけも分からず、まったく侮蔑の意識もたずにこの語を使用することもあったが、痛みを与えるという点ではさほど違いはなかった。朝鮮に古くからある石合戦は、いわゆる「ヨボ」のイメージとはまったく異なる朝鮮人の激しさがはつきりと表れた文化であった。その意味で石合戦における朝鮮人の激しい行為は、日本人の中の朝鮮人像に揺さぶりを掛け、亀裂をもたらさしうるものだったが、それは一九〇八年の段階で日本によって早くも禁止されている。このことからすれば、日本人の中の危うい朝鮮人像は政治と武力によって維持された面があると言える。

韓国が日本の植民地となつて間もない一九一二年、「融和」を阻害する「ヨボ」の使用について日本人の反省を求めた石鎮衡を、釈尾春仍は極端な不寛容の姿勢で拒絶したが、約二十年の年月を経て、三一独立万歳運動と関東大震災を契機としてようやく日本人自ら「融和」を本格的に考え、その一環として「ヨボ」の使用を反省する動きを見せることになる。「ヨボ」という蔑称はその後も何年もの年月をかけて徐々に消滅していったと考えられる。

一つ注目すべきこととして本稿では、「ヨボ」に表れた植民地朝鮮の主体にかかわる興味深い問題について論じた。第一、朝鮮で近代化の洗礼により身なりや考え方などが大きく変化していく中で、昔の朝鮮人の面影や性質をより多く留めている存在が、「ヨボ」のうちの「ヨボ」として差別化されていたことである。それは釈尾春仍が「ヨボ」の使用について日本人の反省を求めた石鎮衡を批判し、朝鮮人が過去の姿や性質を改め、文明化し同化すればいいのだとした要請通りに変貌を遂げた一部の朝鮮人が、自分たちと旧態依然の朝鮮人の間に線引きをしていたことを意味した。第二は、札付きの「ヨボ」として線引きされる朝鮮人の意識に関する問題だが、彼らは「ヨボ」中の「ヨボ」として扱われるという侮辱に耐えなければならなかったが、同時に「ヨボ」は、彼らが強かにも庇護を求めて選択する一種

「ヨボ」という蔑称

の方便でもあった。だめなところがあつても、「ある程度のことは許して」もらえろという札付きの「ヨボ」の特権を彼らは利用していたのである。第三に、蔡万植は小説の中で、日本人町という他者の空間に現れた「モボ」が朝鮮人であることを見抜き、「モボ」も所詮は「ヨボ」でしかないことを皮肉った。「内地人」という他者から与えられた「ヨボ」という呼称をもつて、朝鮮人が自ら、他者の空間における浮いた存在として自嘲気味に植民地民の主体を捉え直していたのである。

注

- (1) 師尾源蔵『新朝鮮風土記』万里閣書房、一九三〇年、一三二～一三三頁。
- (2) 岡田鴻城「内鮮言語の種々相」、『朝鮮土木建築協会々報』、一九三二年六月、二二頁。
- (3) 岩佐禄郎「朝鮮同胞に対する、内地人反省資録」陸軍憲兵司令部、一九三三年、五～一〇頁。
- (4) 同右、三頁。
- (5) 梶山季之『李朝残影』インパクト出版会、二〇〇二年、一一頁。高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』岩波書店、二〇〇二年、一一八～一二九頁。권순인, 『식민지 조선인의 일본인』— 피식민 조선인과의 만남과 식민지의식의 형성 —, 『사회와 역사』第八〇集、二〇〇八年、一一九頁。
- (6) 松田甲『朝鮮叢話』朝鮮總督府、一九二九年、二二一頁。
- (7) 前掲岡田「内鮮言語の種々相」、二〇頁。
- (8) 薄田貞敬『ヨボ記』日韓書房、一九〇八年、二頁。
- (9) 同右、二頁。
- (10) 石鎮衡「ヨボ」と云ふ語に就きて、『朝鮮及滿州』第六三号、一九二二年一月十五日、一四頁。

- (11) 薄田貞敬・鳥越静岐『朝鮮漫画』 日韓書房、一九〇九年。引用は、『復刻版 韓国併合史研究資料18 朝鮮に於ける支那人 朝鮮漫画』龍溪書舎、一九九六年、七八〜七九頁。
- (12) イザベラ・バード著、朴尚得訳『朝鮮奥地紀行1』東洋文庫、一九九三年（原著は一八九八年）、一八九〜一九〇頁。
- (13) 前掲薄田・鳥越『朝鮮漫画』、一四〜一九頁。
- (14) 「ヨボ」が朝鮮人の「代名詞」と思われると同時に、「既婚者」という意味の語とされていたことについては、植木末実「ヨボといふ語に就いて」（『朝鮮教育研究会雑誌』五四号、一九二〇年三月）にも言及が見られる。
- (15) 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ——近代文化批判——』岩波書店、一九九六年、九五頁。前掲南『近代日本と朝鮮人像の形成』（第一章）。
- (16) ツベスタン・トドロフ著、及川馥ほか訳『他者の記号学——アメリカ大陸の征服』法政大学出版社、一九八六年、一四五頁。
- (17) 権錫永「新渡戸稲造の朝鮮亡国論」、『北海道大学文学研究科紀要』一二六号、二〇〇八年十一月。
- (18) 釈尾春仍「ヨボと呼ぶるを喜ばざる朝鮮人に寄語す」、『朝鮮及満州』第六三号、一九二二年十一月十五日、三頁。
- (19) 前掲薄田・鳥越『朝鮮漫画』、七六〜七九頁。
- (20) 本間久介『朝鮮雜記』春祥堂書店、一八九四年、六七〜六八頁。
- (21) 前掲薄田・鳥越『朝鮮漫画』、八四〜八六頁。前掲薄田『ヨボ記』にも似たような記述がみられる。二六頁、二九〜三〇頁。
- (22) H. N. Allen, *Things Korean: A Collection of Sketches and Anecdotes. Missionary and Diplomatic*, Fleming H. Revel Co., New York, 1908. 申福龍訳『朝鮮見聞記』김보달, 一九九九年（原著は一九〇八年）（韓末外国人記録四巻）, 九五頁。
- (23) 細井肇『朝鮮統治心理の根本的變更に関する意見書』一九二四年、一七頁（韓国国立中央図書館蔵）。
- (24) 前掲岡田『内鮮言語の種々相』、二〇頁。
- (25) 柳田国男『明治大正史 世相篇』講談社学術文庫、一九九三年、一八九〜一九一頁。
- (26) 朝鮮時代および旧韓国時代にも石合戦の禁止令は珍しくなかったが、民衆を抑え込むことはできなかった。一九〇八年二月には、統監府がこれを禁止したが、阻止できなかったため大砲を発砲してかろうじて解散させることができたと言われる。『梅川野録』六巻、一九〇八年。当時の新聞によれば、この発砲で一人の重傷者が出ている。『強行禁止』、『皇城日報』一九〇八年二月二日。이순

「ヨボ」という蔑称

그랩스터 지음, 김상렬 옮김 『1905년 친 한국을 건다』 (책과함께, 二〇〇五年)によれば、一九〇四年一二月末頃、「数千名の群衆」が日本軍に石を投げる事件があったとされるが、そのことが石合戦の禁止の要因になった可能性がある。なお、その後も小規模の石合戦が散発的に発生していたと言われる。유선영 「편삼 소말의 문화사」 식민지의 근대주의와 놀이 대중의 저항」, 『사회와 역사』 (第八六集, 二〇一〇年, 二四〇三三頁)。

- (27) 釈尾春苒 「却てヨボより名分論を聞く」、『朝鮮』三卷一号、一九〇九年三月一日、六頁。
- (28) 前掲釈尾 「ヨボと呼ぶるゝを喜ばざる朝鮮人に寄語す」、二頁。
- (29) 前掲石 「ヨボ」と云ふ語に就きて」、一四〇一五頁。
- (30) 同右、一四頁。
- (31) 前掲釈尾 「ヨボと呼ぶるゝを喜ばざる朝鮮人に寄語す」、三頁。
- (32) 前掲岩佐 『内地人反省資録』。
- (33) 難波専太郎 『朝鮮風土記』(上)、建設社、一九四二年、四五頁。
- (34) 趙明熙 「평속으로」、『開闢』第五七号、一九二五年三月、二六頁。
- (35) 李箕永 「어머니의 마음」、『現代評論』創刊号、一九二七年一月、一九八〇一九九頁。
- (36) 道家充之 「森林と同化」、『朝鮮及滿州』第四五号、一九二一年二月一日、一八頁。
- (37) 同右、一八頁。
- (38) 岡崎遠光 (談) 「温突に就て」、『朝鮮及滿州』第五二号、一九二二年六月一日、三二頁。
- (39) 権錫永 『온돌의 근대사』一潮閣 (近刊予定) (第二章)。
- (40) 前掲薄田・鳥越 『朝鮮漫画』、七頁。
- (41) 釈尾春苒 (巻頭言) 「朝鮮とヨボ化」、『朝鮮及滿州』第一〇三号、一九一六年二月一日。
- (42) 李箕永 「음마의 비밀 便紙」、『開闢』第四九号、一九二四年七月、一三九〇一四〇頁。
- (43) 「本道列邑大觀」、『開闢』第五三号、一九二四年一月、一〇九頁。
- (44) 前掲師尾 『新朝鮮風土記』、一三三頁。

- (45) 前掲岡田「内鮮言語の種々相」、二二頁。
- (46) 前掲岩佐『内地人反省資録』、四頁。
- (47) 前掲岡田「内鮮言語の種々相」、二二頁。引用文では、「ヨボ」が「輕蔑の意味」ではもはや使われなくなったかのように言っているが、一九三三年の『内地人反省資録』に見られる用例からすれば、一九三二年の段階でそうなっていたとは見なしがたい。
- (48) 守屋榮夫「朝鮮の開発と精神的教化の必要」、『東洋』第二五卷第一号、一九二二年一月、三一頁。
- (49) 中島敦「巡查の居る風景—一九二三年の一つのスケッチ—」、『中島敦全集』一卷、筑摩書房、一九九三年、三二六頁。
- (50) 前掲岡田「内鮮言語の種々相」、二二頁。
- (51) 廉想涉「万歳前」、『韓国文学全集』三卷、民衆書館、一九五九年、四三二〜四三三頁。
- (52) 「本道列邑大観」、『開闢』第五三号、一九二四年一月、一一八頁。
- (53) 前掲廉「万歳前」、四六一〜四六二頁。このくだりに注目した李ギョソフンは「狡猾にも彼は、へだめなところがあつてもある程度
のことは許して、もらうことと自分の主体性とを交換する」とし、「彼は輕蔑されることを抛り所にして存在する」と指摘している。
이정훈「요보, 모보, 구보— 식민지의 삶, 식민지의 패전」, 연세대학교 국학연구원編『일제의 식민지 지배와 일상생활』, 혜안,
二〇〇四年、二一三〜二四頁。
- (54) 蔡万植「창백한 얼음들」、『채만식전집』七卷、창작과비평사、一九八九年、一四〜一五頁。
- (55) 同右、一四〜一五頁。
- (56) 前掲이정훈「요보, 모보, 구보— 식민지의 삶, 식민지의 패전」、二二二頁。
- (57) 「朝鮮統治の方針」、『東洋經濟新報』一九一〇年九月五日、琴秉洞編『資料』雜誌にみる近代日本の朝鮮認識』四卷、緑蔭書房、一
九九九年、一二七頁。
- (58) 小宮三保松「併合の目的は同化に在あり同化せんとせば先づ彼我親善融和せざるべからず」、『朝鮮』一九一一年九月。引用は、前
掲琴『資料』雜誌にみる近代日本の朝鮮認識』五卷、一七八〜一八〇頁。
- (59) 末永純一郎「朝鮮の現制並日本との関係」、東邦協会『朝鮮叢報』東邦協会、一八九三年。引用は、『韓国併合史研究資料22 朝鮮
叢報』龍溪書店、一九九六年、一七四〜一七五頁。

「ヨボ」という蔑称

- (60) 島田三郎「日韓併合と国民の責任」、『新人』一九〇八年十月一日。引用は、前掲『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識』四卷、三四一頁。
- (61) 渋沢栄一「七方方哩の領土と一千万の同胞とを新に加へたる吾人の責務」、『実業界』一九一〇年十月。引用は、前掲『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識』四卷、四六四頁。
- (62) 前掲難波『朝鮮風土記』(上)、四六頁。
- (63) 米内山震作「内鮮融和に関する一考察」、『東洋』第二七卷第四号、一九二四年四月、五二一―五三三頁。
- (64) 松田甲『朝鮮漫録』朝鮮總督府、一九二八年、一七四頁。前掲松田『朝鮮叢話』、二二一頁。
- (65) 前掲師尾『新朝鮮風土記』、一三三頁。
- (66) 前掲岡田「内鮮言語の種々相」、二二頁。
- (67) 代表的なものに、前掲岩佐『内地人反省資祿』、前掲岡田「内鮮言語の種々相」がある。